

九条武子

長谷川時雨

青空文庫

一

人間は悲しい。

率直にいえば、それだけでつくる。九条武子と表題を書いたままで、幾日もなんにも書けない。白いダリヤが一輪、目にうかんてきて、いつまでたつても、一字もかけない。

遠くはなれた存在だった、ずっと前に書いたものには、
人とか麗人とか、ありきたりの、誰しもがいうような褒めことば
を、ならべただけですんでいたが、そんなお座なりをいうのはいやだ。

その時分書いたものに、ある伯爵夫人が——その人は鑑賞眼が相当たかかつたが、

あのお方に十二單衣ひとえをおきせもうし、あの長い、黒いお髪ぐしを、
おすべらかしにおきせもうして、日本の女性の代表に、外国
へいつていただきたい。

ああいうお方が、もう二人ほしいとおもいます。一人は外交
官の奥さまに、一人は女優に——和歌をおこのみなさるうち
でも、ことに与謝野晶子よさのあきこさんのを——

歌集『黒髪』に盛られた、晶子さんの奔放な歌風が、ある時代
を風靡ふうびしたころだつた。

その晶子さんが、

京都の人は、ほんとに惜んでいます。あのお姫さまを、本願寺から失なすということを、それは惜んでいるようです、まつたくお美しい方つて、京都が生んだ女性で、日本の代表の美人です。の方に盛装して巴里パリーあたりを歩いていただきたい。

といわれた。米国アメリカの女詩人が、白百合しらゆりに譬たとえた詩をつくってあげたこともあるし、そうした概念から、わたしは緋ひざくらのかたまりのように輝かしく、憂いのない人だとばかり信じていた。もつとも、そのころはそうだつたのかもしれない。

桜ですとも、桜も一重ひとえのではありません。八重の緋ざくらか、

樺 かば ざくらともうしあげましよう。五ツ衣 いつぎぬ で 檜扇 おうぎ をさしかざしてといつたらよいでしょうか、王朝式といつても、丸いお顔じやありません、ほんとに輪郭のよくととのつた、瓜実顔 うりざねがお です。

と、おなじ夫人がいつたことも、わたしは書いている。

それなのに、なぜ、その時のままのを、他の人のとおりに、古い今まで出さないのかといえば、わたしは女でなければわからない、女の心を、ふと感じたからで、あたしには偽りは言えない。といって、生 いき ているうちから伝説化されて、いまは白玉樓 はくぎょくろう うちに、清淨におさまられた死者を、今更批判するなど、そんな非議はしたくない。ただ、人間は悲しいとおもいあたるさびしさ

を、追悼の意味で、あたしの直覚から言つてみるに過ぎない。^{しもと}答
の多くくるのは知つてゐるが、手をさしのべて握手するのも目に
見えぬ武子さんであるかもしだれない。

昭和二年ごろだつた。掠屋りやくやが——商業往来にもない、妙な新
手のものが、階級戦士ぶつてやつて来ていうには、
「九条武子さんどこへいつたら、ちゃんと座敷へ通して、五円く
れた。」

それなのに、五十銭銀貨ひとつとは、なんだというふうに詰つ
た。女というものはそういつたらば、まけずに五円だすとでも思
つてゐる様子なので、

「あちらには、阿弥陀さまという御光が、後にひかつていらつし
やるから、お金持ちなのだろう。われわれは、原稿紙の舛目ますめへ、
一字ずつ書いていくらなのだから、お米ツツぶ拾つているような
もので、駄目だめだ。」

と断わつたことがあつたが、吉井勇よしいいさむさんが編纂へんさんした、武子さ
んの遺稿和歌集『白孔雀しろくろじやく』のあとに、柳原燁やなぎはらあきこ子さんが書い
ていられる一文に、

——ある日のことだつた。思想のとても新らしい若い男が、
あの方と話合つた事があつた、その男の話は常日頃つねひごろそうし
た話に耳なれていた私でさえ、びっくりさせられるようなこ
とを、たあ様の前でべらべらとしゃべつた。それにあのたあ

様は眉根まゆね一つ動かさずむしろその男につりこまれたかのよう聞いておられた。そしてその男の話に充分の理解と最も明晰な洞察どうさつをもつて、今の社会の如何に改造すべきや、現内閣の政治上の事に至るまで、とても確かな意見を出して具合よく応答されたのには聞いていた私が呆れた。あき「どうせ華族の女だもの、薄馬鹿に定まつてらあ、武子っていう女は低脳だよ」

たしかにこんな蔭口をたたいた事のあつたこの男も、すつかり参つてしまつて、辞去する頃には、「ねえ、僕らの運動の資金をかせいで下さいな、何? 丁度新聞社から夕刊に出す続きものを頼まれてるんですって? そいつはうまいや、い

や、どうも有難う。」

その男が帰つてしまつたあとで私はたあ様に訊いた。「たあ様の周囲にあんな話をして聞かせる方もありますまいに、いつのまにあんな学問なきつたの?」その時、たあ様は笑いながら、「私だつてそう馬鹿にしたもんじやありませんよ。」

(下略)

この一節^{いつせつ}に思いあわせたのだつた。その訪問者の軽率^{きよし}なのも、掠屋^{りやくや}にもおかしさもあつたが、武子さん^の晩年の救濟事業^{きゆうざい}が、なんとなく冴えてきた心境を感じさせていたので、人を選^よるいとまもなく、聞こうとしたものがあつたのだと思わせられた。死んでしまつた、古い宗教から脱^ぬけて、自分の救いを——と、いつて

わるければ、新しくゆく道を探ねていた人ではないかと、思つていたことにこの一節がぴたときたのだつた。

武子さんを書く場合に、普通常識ではかりきれないものがあるということを、はつきりさせておかないと具合がわるい。身分があるとか、金持ちだとかいうのとは、また異つていて、それらの人たちからも拝まれてもいれば、一般からもおがまれている。ある時は人間であり、ある時は阿弥陀さまと同列に見られ——見る方が間違つてゐるのだが、特別人あつかいで、それが代々、親鸞聖人んじょうにん以来ほんげであり、しかもその祖師は、苦難をなされはしたが、もとが上流の出であり、いかなる場合にも凡下しんげとはおなじで

なく、おがまれ通してきた血であることだ。本願寺さまは本願寺さまでなければならぬところを、大谷家になり、子爵と定まり、伯爵となつたが、それだけでも門徒には大打撃だつたのだ。生仏さまの血脉おちすじが、身分が定まつてしまつたのだから、信徒の人々には一大事で浅間あさましき末世とさえおもわれたのだ。

武子さんはそうした家柄の、本派本願寺二十一代法主明如上人（大谷光尊）の二女に生れ、長兄には、英傑とよばれた光瑞氏がある。

で、また、ここに、他の宗教家と著しく違うところに、親鸞聖人の妻帯は、必死の苦悩を乗りこした淨土であつたのだが、いつからのことか、このお寺だけはお妾めかけのあることがなんでもないこ

とになつていて、お生母さんというものがあることなのだ。姻戚関係もおおっぴらで、もつとも縁の深いのが九条家で、月の輪関白兼実の娘玉日姫と宗祖の結婚がはじまりで、しかも宗祖は関白の弟、天台座主慈円の法弟であつたのだから関係は古い。ごく近くでは、光瑞氏夫人が九条家から十一歳の時に輿入つてゐるし、光瑞師の弟光明師には、夫人の妹が嫁とつがれてゐる。重縁ともなにとも、感情がこぐらかつたら、なかなか面倒そうだ。

山中峯太郎氏著、『九条武子夫人』を見ると、父君光尊師は幼いころから武子さんを愛され、伏見桃山の麓の別荘、三夜莊にいるころは、御門跡さまとお姫さまのお琴がはじまつたと、近所のものが外へ出てきたりしたという。武子さんの文藻はそ

してはぐくまれたというが、この父君の雄偉な性格は、長兄光瑞師と、武子さんがうけついでいるといわれているそうで、武子さんは暹羅の皇太子に入^{にゆうよ}輿の儀が会議され——明治の初期に、日支親善のため、東本願寺の光瑩^{こうけい}上人の姉妹^{はらから}が、清帝との縁組の交渉は内々進んでいたのに沙汰^{さた}やみになつたが——武子さんは、十七の一月三日、暹羅皇太子が西本願寺を訪問され、武子さんも拝謁されたが、病いをおして歓迎、法要をつとめ、その縁談に進んで同意だつた、父法^{ほつす}主が急に重態となり遷化されたので、そのままになつてしまつたという、東本願寺の元老、石川舜^{しゆんた}台師の懐旧談がある。——兄光瑞師——新門様——法主の後^{あと}嗣^{つき}者が革命児で、廿二、三歳で、南洋や、西藏^{チベット}へいつている

ことを見ても、その人たちと似た気性といえば、武子さんはなみなみの小さい器ではない。

しかし、愛された父法主は逝き、新門跡は印度にいてまだ帰らず、ここで、木のぼりをして叱られないでお猿さんと愛称された愛娘に、目に見えない生活の一転期があつたことを、見逃せない。それは、新門跡夫人の父君、九条道孝公が、家扶をつれて急いで東京から来着し、主な役僧一同へ、

——かねて双方の間に約束いたしおきたることは、もし当山に万一の事ありし時は、速かに私が罷り出て、精々御助力いたすべく——

これはみな、前記山中氏の著書のなかにあるから、信頼してよ

いものと思う。こうなると、前法主お裏方の勢力も、お生母さんのお藤の方もなにもない、お裏方よりは愛妾お藤の方のほうが、実はすべてをやつていたのだというが、もはや新門跡夫人の内房でなければならない。と、同時に、武子さんの位置もおなじお姫さまでも、かわつたといわなければならない。

十八、十九、二十と、山中氏の著書の中にも、美しき姫の御縁談御縁談と、ところどころに書いてあるが、武子姫の御縁談のことを、重だつてお考えになる方は、お姉君の籌子夫人が、その任に当られるようになりましたとある。本願寺重職の人々が、それぞれ控えていまして、その人々の意見もあり、籌子夫人お一方のお考えどおりには、摶行かぬ煩らわしい関係になつてゐるのでし

た、ともある。

その一節を引くと、

二十の春を迎えたま給いし姫君、まして、世の人々が讃美の思いを集めています武子姫の御縁談につきまして、本願寺の人々が、今は真剣に考慮するようになりました。

「たあさまは、二十にお成りあそばしたのだから」

「しかし、それについて、御法主^{ごほつす}は何とも仰せがないから、まことに困る。」

「我れ我れから伺つてみようではないか」

と、室内部長とか、執行部長とか、本願寺内閣の要職にある人々が、鏡如様（光瑞師）の御意見を、伺い出ますと、

「お前たちが選考して好い。己には今、これという心当りがない」と、一任するという意味でした。（註『九条武子夫人』、一四九頁）

それよりさきに、若き新門様光瑞師は、外国にいたときに、愛妹武子さんの将来を托す人をたつた一人選みだしたのだつた。よき伴侶はんりょと見きわめ、妹を貰もらつてくれといつたのだというふうに、わたしはきいている。私は一連枝いちらんしにすぎないからと、先方は一応辞退されたのを、人物を見込んで言いだした人は、地位などで選みはしなかつたのだから、二人だけの約束は結ばれた。帰朝すると、夫人にもその事は話され、武子さんもきて、その人も帰

ると表向きの訪問が許され、内園を、連れ立つての散歩も楽しげだつたというのに、それはどうして破れたのか――

その間の消息は、山中氏の著書ばかり引くようだが、

あらためて申すまでもなく、才貌ともにお麗しく氣高い武子姫に、御縁談の申込みは、すでに方々から集まっています。中にも、先ず指を折られるのは、東本願寺の連枝（法主の親戚）の方でした。（中略）東本願寺の連枝へ、武子姫が入輿されると、両家の間はいよいよ親密に結ばれることになるのでした。しかしながら、西本願寺の重職の人々にしてみますと、法主の妹君として、まして世に稀まれなる才能と、比いなき麗貌の武子姫が、世間的に地位なく才腕なき普通

の連枝へ、御縁づきになる事は、法主鏡如様の權威に^{かか}関わり、
なお自分たち一同の私情よりしても、堪えられないことに思
われるのでした。――

おお！ まあ、そんなことで否決して、会議は幾度も繰りかえ
されたのだ。

「明^{みょう}如^{によ}様（光尊師）が御在世ならば、御一存ですぐ決ま
るのだけれど……」

「――あさまが家格の低い所へ御縁づきというのでは、我
れ我我が申^{もうしわ}訳^けないことになる。」

「それは無論、御在世ならば、先方の人物本位にと仰せられ
るに相違はない。」

「いや、しかし、子爵以下では、何とも当家の権威に係る」

——（『古林の新芽』、一五二頁）

おお！ まあ、なんと、そんなことで、華族名鑑をもつてきて
も、選考難に苦しんだとは——

ここで、前記の、

「お前たちが選考してよろしい、己には今、これという心当りが
ない。」

という光瑞師のいつたことが、まことに痛切に響いてくる。

私は一連枝にすぎないからと、一応辞退したというその人にも
先見の明がある。私はその名もきいたが——

「世間的地位なく」と断わるのは、若い人にむかって無理だと

誰しもおもおう。それは、東の法主の後嗣者でもないのにという意味にとればわかる。だが、「才腕なき普通の連枝」とは、失礼なことを言つたものだ。この人、先ごろからの、東本願寺問題に、才腕ある連枝との評が高い。

かりそめの 別れと聞きておとなしう うなづきし子は若かりしかな

三夜莊 父がいましし春の日は花もわが身も幸おほかりし
緋の房の襖はかたく閉ざされて今日も寂しく物おもへとや
——『金鈴』より——

東西本願寺の由来は、七百年前、親鸞聖人の娘、弥女が再婚し、夫から譲られた土地に、父親鸞上人の廟所をつくつたのにはじまる。この弥女は覺信尼といい、この人の孫が第三世覺如。親鸞の子善鸞から、如信となり、覺信尼の孫、覺如の代となるまでには、覺信尼は創業の苦労と煩惱もあつたわけだつた。八世の蓮如上人の時、伝道教化につとめ、九世実如のとき、準門跡の地位にまでのぼつたのだ。十世証如のころは戦国時代ではあり、一向一揆は諸国に勃発し、十一世顯如に及んで、織田信長と天正の石山合戦がある。

石山本願寺は、現今の大坂城本丸の地点にあつて、信長に攻め

られたのだが、一向宗は階級的な強さがあるので、負けるどころではなかつたが、綸旨が下つて和議となつたのだつた。天正十九年に、豊臣秀吉から現在の、京都下京堀川、本願寺門前町に寺地の寄附を得た。しかし、この時に今日の東西本願寺——本願寺派本山のお西と、真宗大谷派本願寺のお東とが分岐した。東は、西の十一世顯如の長子教如の創建で、長子が寺を出たということには、意見の相違があり、閨門の示唆によつて長子が退けられたともいわれている。

東本願寺教如上人は、徳川家康の寄進で、慶長七年に六町四方の寺地を七条に得、堂宇も起してもらつたが、長子であつて本山を追われたという苦い経験が、世々代々、長子伝燈の法則が厳し

い。そこに、いかなる凡庸でも長子より法主なくということになり、見込みのある御連枝ごれんし（兄弟、近親）でも、御出世はないものと見られ、せめて子爵でなくとも、男爵ででもおありならと、武子さんの配偶が断られた訳もそこにある。三百年間親戚としての往来はおろか、敵視状態だつたのが、明治元年に絶交を解いて、交際が復活したからとて、両方の法主——光尊、光瑩の両裏方を、お互いに養女としあつて、戸籍上の姻戚関係をむすんだといつても、たからお宝娘の武子さんを、となると、惜んだもののあつたのも、わからぬくもない。

本願寺さんのお姫ひいさんは、本願寺さんでおきたいと、京都の人たちは惜んでいるというのも、いつまでもあの麗人がお独ひとりみ身

でと、案じているというのも、結びあわせてみると、卑俗な言い
かただが、西から東へ人気が移る憂いは充分ある。お西さんから
お東さんへ、掌てのなかの玉をさらわれるふうに考えたものもなく
はあるまい。

なんと、因襲と伝統の殻との束縛よ、進取的な、氣宇の広い若わ
人こうどたちには住みにくい世界よ、熟議熟議に日が暮れて、武子さ
んの心はぐんぐんと成長してゆく、兄法主には、大きく世界の情
勢を見るなどを啓発され、うちにはロシアとの戦争に、報国婦人
団体が結成され、仏教婦人会の連絡をとり、籌子夫人について各
地遊ゆうぜい説に、外の風にも吹かれることが多くなつて、育ちゆく心
はいつまでおかわいいお姫ひいさままでいるであろうか。人を見る目も

出来れば人の価値も信実もわかつてくる。阿諛と権謀の周囲で、離れてはじめて貴とさのわかるのは真だけだ。

一葉女史の「経づくえ」は、作として他のものより高く評価されていないが、わたしはあるの「経づくえ」のお園の気持ちを、今まで持つていてる女はすけなくはなつたであろうが、あるとおもう、明治年代の、淑やかに育てられた、つつしみぶかい娘には、代表してくれている涙を包んでいる。の中には、一葉女史の悲恋をも多分にふくめているが、武子さんにあの読後感をききたいとおもいもした。無論、あそこはぬけ出してしまつて雑誌『白樺』の武者小路氏の愛読者となつたのは、心持ちが整理されてからではあろうが、別れてのちに、しみじみと知るまたとなきその人

のよき、世をふるにしたがつて、思いくらべて惜しむ心はなかなかにあわれは深い。

もとよりわたしは、たしかにそうと断定しない。わたしがその人の口からきいたのではないから。それにもかかわらず、わたしはいたましく思い、人世とはそんなものだとしみじみと感じる。

もしそこに、若き 灼熱(しゃくねつ) の恋があつたら、桃山御殿の一部で、
太閣秀吉の常の居間であつたという、西本願寺のなかの、武子
さんが住んでいた飛雲閣(ひうんかく) から飛出されもしたであろうし、解決
は早くもあつたろうに、若き御連枝はムツとしてそのまま訪問さ
れず、しかも、その人も配偶をむかえてから、代(かわ)る女(もの)はなかつた
との歎(たん)をもたれたのだから悲しい。

も一度、

かりそめの 別れと聞きておとなしうなづきし子は若
かりしかな。

この歌は、嫁とつがれてのち、夫つまぎみ君を待つて読んだ歌だと解釈さ
れているけれど、もうそのころ、武子さんは二十三歳、令嬢とし
ては出来上りすぎている立派な人だつた。十八に、十七に、十九
におきかえて考へると、おとなしうなづきし子が目に見えてく
る。

爵位局より発布の「尊族簿」が幾度もひつくりかえされている
うちに、日は経たつてゆく。お家柄第一、二十六、七歳より三十歳

までの若様で、勝すぐれた家の爵位を嗣ぐ人、宗教は浄土真宗。これだけ具備した人を探しだそうとするのだが、幾度繰つても頁数はおなじで、いなかつた人物が紙の上に飛出してくるはずもない。ここまで来て籌子夫人から、天あまくだ降り案が提出されたのだから、捏ね廻してしまつたものには具合がよかつたと、ことが運んだわけだつた。

山中氏の『九条武子夫人』百六十二頁に、

——重職会議へ極めて内々のお諮はかりがありました。御生家ごせいかの九条公爵の御分家たる良致男爵を選考するようとにとの、それは夫人よりの直接の御相談なのでした。

籌子夫人は十一歳の時に、鏡如様のお許いいなづけ嫁として、大谷

家へ入輿せられ、幼き日より朝夕を、武子姫と共に——良致男爵は籌子夫人の弟君に当られます。なお、夫人の妹君には九条家に紅子姫（きぬこ）がいられるのでした。ことに、良致男爵へ武子姫が、なおまた鏡如様の弟君の惇磨様（あつまる）（光明師）へ紅子姫が、御縁づきになりますことは、籌子夫人御自身の深いお望みなのでした。その曉には、九条家と大谷家との御兄弟が、互にお三方（さんがた）とも御結婚になり、両家にとりてこの上のお睦（むつ）みはないのでした。

籌子お裏（うらかた）方より直接のお詰り（はか）を受けまして、重職の人々は、九条良致男爵を、初めて選考の会議に上すようになりました。それまでは、子爵以上とのみ考えていました。

なぜ、子爵だ、男爵だというのか、それは前に、東の御連枝といいう人を、無爵だといって断わつたからで、男爵というのに拘わるのも、それでは男爵になれるようしますからとまでいつて来たのを、すくなくも子爵でなくてはと拒絕したといわれているのを、わたし自身が頷くために、引いてみたのだが、良致氏は前から男爵ではなく、武子さんを娶る前になつたのだつた。

良致氏はお気の毒な方かたで、やつたり、とつたりされた人だつた。ずっと前に他家へゆかれ、それから一条家の令嬢の婿むこがね金として、養われていたが帰されて——やつぱりこれも例をひいた方がよいから、山中氏の前のつづきを拝借すると、

——かつて一条公爵家の御養子として、暫く同家に生活して

いました。それは、元来一条家よりの懇ろなお望みがありまして、御結縁になつたのでした。しかし、家風の上から、その後、男爵は再び九条家へ、お復りになつたのでした。

(前掲一七四頁)

なぜ、この山中氏の著書からばかり引例にするかといえば、材料の蒐集に、『婦人俱楽部』の多くの読者と、武子さんの身近かな人々からも指導と協力を得ているといい、筆者はもうすでによばず、発行が、野間清治氏の雄弁会出版部であり、およそ間違いのないものであること、著者の序に、初校を終る机のそばに、武子さんが、近く來りますように感じつつ、合掌、と書かれた敬虔な著であるので、信頼して読ませて頂いたからだ。

その行間からわたしは何を見たか——

籌子夫人のこのお婿さん工作も、愛弟だつたときけば領^{うなづ}けるし、
実家の嫂^{あによめ}は東本願寺からきた人で、例の御連枝^{ごれんし}と縁のある方^{かた}であ
り、それらの張合もないとはいえまいが、良致氏は、籌子夫人の
手許^{てもと}へ引きとられていたというものがあるから、武子さんとも顔
を合せていなくてはならないのに、この書では、結婚の日が初対
面と記されてある。この初対面という方に従つてゆくと、これは
また、あれほど大切にしたお姫^{ひい}さんを、なんと手軽にあつかつた
ものだか——もとより何もかも、知りすぎる位にわかつてゐ方が
進めてゆくのだから、誰にも安心はあつたであろうが、いやしく
も人生の最大事業をおこなう男女当事者が初対面とは——無智蒙^も

昧^{うまい}な親に、売られてゆく、あわれな娘ならば知らず、一万円持参で、あの才色絶美、京都では、本願寺からはなすのはいやだと騒がれた美女^{ひと}なのに――

籌子夫人は幾度か上京し、仕度万端、みな籌子夫人の指図^{さしつ}だつた。

も一度。

緋^ひの房^{ふき}の襫^{ふすま}はかたく閉ざされて今日も寂しく物おもへと

や

三夜^{さんや}莊父^{やそう}がいましし春の日は花もわが身も幸^{さち}おほかり

し

緋の房の襖の向うは、彼女の胸の隠家おくがでなくてなんであろう。

結婚式をあげに東京へ出発、馬車のうちにはうなだれがちに、
武子さんがいた。本願寺の正門から、七条の駅へ——けれど
も、御婚儀の日が、初対面の日なのでした。——昨日までの
武子姫は、良致男爵……その人について、何も御存じがない
のでした。男爵においても、それは同じく、新夫人の性格そ
のほか、更に御承知はないのでした。

(『九条武子夫人』より抄)

——七条駅近くの大路には、東本願寺の門がある。

性格も趣味も教養も、まさしく反対の二点にたつてゐるとも書

かれている。九月二十五日に九条家に入り、新男爵邸に即日移り、十二月には、先発の法主夫妻のあとを追つて新婚旅行に、歐洲へ渡航する。しかも新郎は、英國に留学する約束だつた。黙々読書する良致氏に、仕度の相談にゆくと、

「よろしいよう」

と静かに答えるだけだつたといふ。

印度では光瑞法主一行の、随行員も多く賑わしなかつた。少女時代をとりかえしたように武子さんが振舞うと、明るい笑声のうちに、いつも姿を見せないのが良致氏であつたといふ。籌子夫人が気にすると、船室にかくれて読書しているといふ。一方が明るくなると、一方はだんだん寡黙になる。

船室でお茶がすんで、ボーリーが小さなテーブルの上をかたづけにくると、武子さんは立上る、

「では失礼します。」

「どうぞ。」

水の如き夫妻だ。

武子さんも気にせず、良人もそれに不満足を感じるような、世俗的なのではないと、山中氏はいつていられるが、しかし、わたしはつきり言う。それはどつちかが軽蔑けいべつしているのだ。どつちかがすくんでいるのだ、でなければもつと、重大な、何か、ふたりは、表向きだけの夫婦ごつこ、互に傀儡かいらいになつたことを知りすぎているのだ。性格的相違だけには片づけられないものがありすぎているのだ。

る。そして、短かい外遊期間中なのに、良致男は別居してしまつた。だが、武子さんは社会事業の視察、見学をおこたらなかつた。シベリア線で、籌子夫人して武子さんが帰朝ときまつたとき、訣別^{けつべつ}の宴につらなつた良致氏は、黙々として静かにホークを取つただけで、食後の話もなく、翌日、出立^{しゆつたつ}のおりもプラットホームに石の如く立つて、

「（）きげんよう」

と、別れの言葉は、この一言だけだとある。

良致さんという人が、この通り沈黙寡言な、哲学者かと思つていたらば、先日、ごく心やすくしていたという男の人^が来て話す

には、なかなか隅すみにおけない、白粉おしろいを袖そでや胸にもつけてくる人だといふ。新婚のころは、特別に、そんなムツとした人にならざるを得ぬことがあつたものとおもえる。世間からは花の嫁御よめごをもらつて、日本一の果報男かほうおとこといわれたが、他人ではわからないものが、その人にとつてないとはいえない。

また、それでなければ、新婚三月の新夫人をかえしてしまつて、滞欧十年、子までなさせて、そこの水に親しんではいられないはずだ。

三年たつた。ここいらから武子さんが、麗うるわしい武子だけでな

く、同情と、人気とその人のもつ才能とが一つになつて、注目される婦人となつた。武子さんはいよいよ光り、良致さんはよく言われなかつた。

空閨を守らせるとは怪しからん。と、よく中年の男たちが言つていた。操持高き美しき人として、細川お玉夫人のガラシヤ姫よりももつと伝説の人々に、自分たちの満足するまで造りあげようとした。

この間も、斎藤茂吉博士の隨筆中に、武子夫人が生ていられたうち書かなかつたがと、ある田舎へいつたら、砂にとつた武子さんはいせき物を見て、ふといふといと下男たちが笑つていたということを記されたが、そんなばかげた事もおこるほど、よ

つてたかつて窮屈な型のなかへ押込んでいった。

三

武子さんの第一歌集『金鈴』^{きんれい}を、手許においたのだが、ふとり失なつてしまつて、今、覚えているのは、思いだすものよりしかないが、

ゆふがすみ西の山の端は^{かす}つづむ頃ひとりの吾われは悲しかりけ
り

見渡せば西も東も霞かすむなり君はかへらず又春や來こ

作歌の年代を知るよしもないが、これらはずつと古くうたわれ

たものときいている。一年半以上も外国でくらして、秋も深くなつて帰ると翌年の春、籌子夫人が急逝された。その人の望みによつて武子さんの生涯は定まつてしまつたのに、それを望んだ人は死んでしまつて、妻という名の、桎梏しつごくの枷かせをはめられて残された武子さんの感慨は無量であつたろう。全く運命というものは変なものだ。

しかし、おかげ遊ばした総裁様の御遺志をお伝えするが使命と、武子さんのうるわしい声が、各地巡回宣伝にまわられると、仏教婦人会の新会員は増えてゆくばかりなので、九条武子となつても、本願寺に起おき臥ふしして、昔にもまさつて本願寺の大切な人であつた。そして、思い出したように、お美しい方が空闇に泣くと

は、なぞと、時々書いたりいわれたりしたが、武子さんの場合だけは、それが不自然ではなく、なんとなくそれで好いような気がしていた。語らざる了解があるように思われた。そうしているほうが、お互が気楽なのではないかと思えた。

遺稿和歌集の『白孔雀』(しろくじやく)をとつて見ると、

百もも人のわれにそしりの火はふるもひとりの人の涙にぞ
足たる

その一步かく隔りの末をだに誰たれかは知りてあゆみそめむ
ぞ

この風や北より吹くかここに住むつめたき人のこころよ
り吹く

この胸に人の涙をうけよとやわれみづからがくるしみの壺

おもひでの翼つばさよしばしやすらひて語れひとときその春のこと

影ならば消ぬべしさはれうつそ身のうつつに見てしおも

かげゆゑに

引く力拒こばむちからもつかれはてて芥あくたのごとく棄すてられに
しか

たまゆらに家をはなれてわれひとり旅に出でむと思ふと

きあり

たたかへとあたへられたる運命かあきらめよてふ業ごう因いん

かこれ

執着も煩惱ぼんのうもなき世ならばと晴れわたる空の星にこと

問ふ

空しけれ百人千人讚ももたりちたりたたへてもわがよしとおもふ日のあらざれば

夢寐の間まも忘れずと云いへどわするるに似たらずやとまた

歎けりこころ

むしろわれ思はれ人のなくもがなあまりに病めばかなしきものを

| 滞洛手帖十四首の中から |

ふるさとはうれし散りゆく一葉ひとつさへわが思ふことを知る

かのやうに

ふるさとはさびしきわれの心知れば秋の一葉のわかれ告
げゆく

叫べども呼べども遠きへだたりにおくれしわれの詮なき

つかれ

岐れ路を遠く去り来つ正しともあやまれりとも知らぬ痴

れびと
人

夕されば今日もかなしき悔の色昨日よりさらに濃さのま

される

水のごとつめたう流れしたがひつ理りのままにただに生

きゆく

震災後下落合しもおちあいに家を求めてからを知っている人が、武子さんの日常を、バサバサしたなつかしみのない、親分の女房みたいだと評し、わざとらしいしなをつくるが、電話の声と地声とはちがい、外から帰ると寛袍どてらにくつろぎ、廊下は走りがちに歩く、女中にきいてみたら、京都へゆく汽車の中では、ずっと身じろぎもないで、座つたままだというのに——と、良致さんとの夫妻生活を、およそ男性のもとめるイットのないものとくさしたが、わたしは胸が苦しかった。武子さんはもうそのころ自分の表面的な職分と、自分の心だけでいるときとの、けじめがはつきりついて、卑近な無理解など、どうでもよいとの決心がついていたにちがい

ない。なぜなら、その人がいつたようただ、あざけた女に、こんな心の声があろうか、

さくら花散りちるなかにたたずめばわが執着のみにくさ
はしも

ちりぢりにわがおもひ出も降りそそぐひまなく花のちる
日なりけり

さくら花散りにちるかな思ひ出もいや積みまさる 大谷
の山

まぼろしやかの清滝きよたきに手をひたし夏をたのしむふるさ
との人

やうやくに書きおへし文いま入れてかへる夜道のこころ

かなしも

これはみんな、世にない人を思い出した歌ではない。ふるさとの人は、誰をさしていつたものだろう、そんなことは言つては悪いと叱られるかもしれない。だが、それだからこそ人間ではないか、それだからわたしは武子さんが悲しく、そして忘れないのだ。ただ、わたしはいう、あの豪気な、大きい心の人が、なぜその苦しみとひたむきに戦わなかつたか、この人間の苦しみこそ、宗祖親鸞も戦つて戦いぬいて、苦悩の中に救いを見出しが大成したのではなかろうか、良致氏が外国で家庭生活をもつていたことが、かえつて武子さんを小乗的にしてしまつたのかもしれない、仏教のことばなんかつかつておかしいが、そんなふうにも

おもえる。さし詰つた苦しさというものは、勇気を与えるが、それも長く忍んでいると詠歎的になつてしまふものだ。

『白孔雀』の巻末に、柳原 白蓮さんひやくれんが書いているから、すこし引いて見よう、

百ももたり人のわれにそしりの火はふるもひとりの人の涙にぞ
足たる

第一この歌に私はもう涙ぐんでしまつた。あのたあ様は本当に深い深い胸の底に涙の壺を抱いていた人だつた。

私が今の生活に馴なれるまでの間を、たあ様はどんなに励ましかつ慰めてくれたことであつたろう、「貴女あなたは幸福よ。」この一言によつて私は考えさせられた。人というものはどうか

すると自分の幸福を忘れている事がある。幸福だという事を忘れれば幸福にはぐれてしまう、という事を教えられた。私は何といつての方に感謝していいかわからない。人こそ知らね私には深い思いがあるからである。

美しい裸形らぎようの身にも心にも幾夜かさねしいつはりの衣きぬ

「ねえ、私だつて、ああのよ、こうなのよ、ねえ、よう。」

甘えるように私の手をとつてゆすぶつたりした。私は、「そんなら御勝手になさいまし、ただ、くしゃくしゃ語つたつて、私がどうにもして上げられるもんじやなし。」とつんと突き放したものいいをすると、その時、ほつとためいきをつきながら「もういわないから、かんにんよ。」あの時の少女のよ

うな身のこなしが、今も目に浮かんで来てしようがない。

——たあ様の歌は本当の実感から生れたものだつた。

私の友よ、友の靈よ、この歌の一つ一つが、貴女あなたの息から生れたものなのだ、それぞれに生命いのちがあるのだ——

人生の裏も底も、涙も知りつくしたはずの歌人、吉井勇よしいいさむさん
が『白孔雀』巻末に書いた感想をひいてみると、

——今その手録された詠草を見ると、「薰染くんぜん」に収められた歌以外のものに、かえつて真実味に富んだ、哀婉あいえん痛切なる佳作が多いような気がする。私は先ず手録された詠草の最初にあつた、

百人のわれにそしりの火はふるもひとりの人の涙にぞ足
る

の一首に、これまでの武子夫人の歌に見られなかつたような情熱を覚えると同時に、かなり感激した心持でこの新しい歌集『白孔雀』の編輯へんしゅうに従うことが出来たのであつた。

この十一月初旬、この遺稿の整理をしに往つた別所温泉は、信濃路しなのじは冬の訪れるのが早いのでもう荒涼たる色が野山に満ちて、部屋の中にいても落葉の降る音が雨のように聴えた。が、手録の詠草を一首々々読んでゆくうちに、私の耳にはだんだんそんなものの音も聴こえなくなつた。私は真実味の深い歌が見出される度たびごとに、若うして世を去つた麗人いたを傷むの

情に堪たえなかつたのである。

死ぬまでも死にての後もわれと云ふものの残せるひとす
ぢの路

そういう死をうたつた歌や、

この胸に人の涙もうけよとやわれみづからが苦しみの壺
といつたような悲しみの歌を読むと、私の目はひとりでに潤うる
んだ。

たまゆらに家を離れてわれひとり旅に出でむと思ふとき
あり

たたかへとあたへられたる運命かあきらめよてふ業ごういん
因いん
かこれ

うつくしき人のさだめに黒き影まつはるものかかなし女
おみな

は

そのことがいかに悲しき糸口と知らで手とりぬ夢のまど
はし

まざまざとうつつのわれに立ちかへり命いとしむ青空の
もと

しかはあれど思ひあまりて往きゆかばおのがゆくべき道
あらむかな

何氣なく書きつけし日の消息がかばかり今日のわれを責
むるや

醉ざめの寂しき悔は知らざれど似たる心と告げまほしけ

れ

こういう寂しい心境をうたつた歌を読んで、その人がもうこの世にないということを考えると、人生、一路の旅の、果敢なさを思わずにはいられなかつた。——『白孔雀』から——

吉井さんにして、燐子さんにして、人世の桎梏の道を切りひらいて、血みどろになつてこられたかたちだ、その人の心眼に何がうつつたか？ ただ、寂しい心情とのみはいいきれないものではなかつたろうか。白蓮さんの感想には、書かれない文字や、行間に、言いたいものがいっぱいにある気がする。遠慮、遠慮、遠慮！ 昔だつたらわたしなど、下々ものがこんなことを言つた

ら、慮外のものと、ポンとやられてしまうのであろうが、みんなが武子さんを愛しむ愛しみかたがわたしにはものたらない。こんな、生きた人間を、なんだつて小さな枠わくに入れてしまうのだろう。——いや、武子さんは、御自分のしていることがお好きなのでした。御満足だつたのです。一番好きなことをしていただのです。

こういった中年男は、良致さんが大好きで、男は何をしても、細君はいとまめやかに、愛らしくという立場だから、失礼なことをいうのも仕方がない。どんな売女でももつてゐる、女っぽさや、女の純なものがないの、けちんぼだの、勘定かんじょうが細かいのといつた。わたしはそれに答えてはこういう。

武子さんは、「女」を見せるなどを、きらつたのだ、誰にも見

られたくなかつたのだ。わざとする媚態びたいがあるというが、それは、多くのものに、よろこばせたい優しみを、とる方がそうとりちがえたのではないか。算当さんとうが細かいというのは、本願寺はある折、疑獄事件があつて、光瑞法主はそのために、責せめをひいて隠退され、武子さんは、婦人会の存続について大変心配された。そんなことから、日常のことにも気をつけるようになられたのだろう。『無む憂華ゆうげ』の中の、「父に別れるまで」の一節に、

——今思うとこんなこともあつた。そのころの道具掛がかりの者が知らなかつたのかどうか、割れなくていいというような意味から、金の水みず指さしを稽古用に出してくれたのが、数年のあとで名高い和蘭陀毛織オランダモウルの抱桶だきおけであつたことや、また幾千金に

かえられた堆朱^{ついしゆ}のくり盆に、接待煎餅^{せんべい}を盛つて給仕^{きゅうしき}が運んでおつたのもその頃であった。

そうした器物まで払いさげられたりして、経済のこともよくわかつていたのであろうし、それよりも、これはあとにもいうが、つまらないことで失いたくない、要用なことにと、いつも心に畳^{たた}んでいられたのだと思う。

武子さんは、あまり広く愛されて、世間のつくつた型へはめられてしまつて、聖なる女として、苦しんだ。その切^{せつ}ないなかに生きぬいて、自分の苦しんだのとは、違う苦しみかたをしている気の毒な層の人たちを、広く愛そうとする、真に、しつかりした心

の転換期がきたのではあるまい。二十年、恋は空むなしいと観じ、本願寺婦人会の救済事業を通じて、心身を投じようとしたその時に、あわれ死がむかつて来たのではあるまいか——

おせつかいな世間は、武子さんが完全な人となろう、としているときに——外国にいる人も、そちらにいる方が家庭円満であつたかもしぬれないのに、麗人に空くうけい閨を十年守らせるとは何事だと、あちらで職について、帰りたがらぬ良致氏を無理に東京へ転任ということにしたということだが、十年ぶりで、帰る人にも悩みは多かつたであろうし、武子さんは、まぶたもはれあがるほど泣きに泣いて、こころをつくろう人世へのお化粧をしなおされたということだ。

死ぬる日の半月ばかり前に、偶然に行きあつたのは、かの、かりそめの別れとすかされて、おとなしく頷うなづいて別れた東の御連枝だつた。だが、今度はかりそめの、この世での、それが長い別れになつてしまつた。おもいがけない病やまいが急に重おもつて、それとなく人々が別れを告げに集あつまるとき、その人も病院を訪れたというが、武子さんは逢わなかつたのだつた。お別れはもう先日ので済んでおりますと、伝えさせたという。

私が、戯曲的に考えれば、生母の円明院えんみょういんお藤の方が、手首にかけた水晶の数珠じゆずを、武子さんが見て、

おかあさま、そのお数珠を、私の手にかけてください。

といわれたということが、新聞にも出ていたが、その水晶の数珠は、かつて、武子さんが、御生母へあげたものだということから、その数珠には、母子だけしか知らない温かい情（もの）こもが籠つているかも知れないと、思うことだつた。

君にききし 勝 鬱 経 のものがたりことばことばに光りありしか

君をのみかなしき人とおもはじな秋風ものをわれに告げこし
この日ごろくしき鏡を二ツもてばまさやかに物をうつし合ふ
なり

勝鬱經は、印度舍衛國王波斯匿（しゃえ）（はしのく）と、摩利夫人（まりぶにん）との間に生れて、

阿踰闍あゆしゃ 国王に嫁した勝鬘夫人ぶにん が仏教に帰依きえ した、その説示だとい
う、最も 大乗だいじょう の尊さを説いたもので、わが聖徳太子も、推古すいこ
女帝に講したまいし 御経おんきょう ときいたが、君とは、父法主ほつす でも、
兄法主でもない人を指している。

築地別院つきじべついん に遺骸いがい が安置され、お葬儀の前に、名残りなご をおしむも
のに、芳貌ほうぼう をおがむことを許された。

二月八日の宵よい だつた。梅の花がしきりに匂にお つていた。わたしは
心ばかりの香こう を焚いて、「秋の夜」と署名した武子さんからの手
紙を出して、机上においた。そこへ、安成二郎やすなりじろう さんが訪れられ
て、どうしてお別れにいつて来ないのかといわれた。蘭燈らんとう にて

らされて、長い廊下を歩いていつて、^{しづか}静な、清らかな美しいお顔を見ると、全くこの世の人ではない気がしたといわれた。そして、どうしてゆかないのかと、再び問われた。

あまり多くのものに、死者の顔を見せるのは嫌いだから、見られるのはお厭^{いや}だろうと思うと、答えたわたしの胸には、ちょっと言いあらわせないものが走った。

震災前^{ぜんぜん}、あの別院が焼けない前に、ある日の日かげを踏んで、足許^{もと}にあつまる鳩^{はと}を避けて歩きながら、武子さんに、ずっと裏の方の座敷で逢つたことがあつた。その時ふと胸にきたものは、あんなに麗^{うらら}かな面^{おも}ばせで、れいれいとした声で話されるに、憂苦^{ゆうく}といおうか、何かしら、話してしまいたいといったようなものを持

つていられるということだつた。

その時、

「燁さ^{あき}まは、どうしてあんなことをなすつたのでしようね。」
と、突然と武子さん^がいつた。それは、白蓮^{びやくれん}さんが失踪して
間もなくで、世上の悪評の的になつているときだつた。

二人は目を見合^{あわせ}たきりで、探りあう気持ちだつた。この人
は、もつともつと大きい苦悶^{くもん}をかくしているなど、思つた。

震災に、なんにも持たずに逃れ出たが、一束^{ひとたば}の手紙だけは—
—後に焼き^{いた}すてたというが、——あの中^{なか}で、おとしたらばと胸を
おさえて語つたお友達がある。——そ^{ういえ}ば、秋の夜であり、

きくであり、そのほかにも、種々のかえ名があるにはあつたが――

|

武子さんは、もうちやんと、ああ出来上つてしまつて、あれがいいのだから、美人伝へよけいな感想なんか書いてはいけないと。知つている人たちがみんなこういう。もとより、武子さんはわたくしも大事にする。けれど、もつと大胆に、いいところをいつてもいい、人間らしいところを話はなしても、あの方の苦節に疵きずはつきはない。お人形さんに、あの晩年の、目覚めざめてきた働きは出来ない。本願寺という組織に操あやつられてでも、それを承知で、自分自身だけの、一ぱいの働きをするということは、ああいう場処にいる人は、あれでよいので、あらゆる事に働き出そうとしたことは、劇

や舞踊の方にまで進んで、かなり一ぱいの努力だつたと思う。

そういうえば、武子さんは快活な、さばけたところのあるのは、幼いときからだというが、人徳を知るのに面白い逸話がある。ある美術家のうちの床の間に、ブロンズのドラ猫があつた。どこまほ 埃りまみれでよごれているのを、武子さんは猫が好きだつたが、震災で焼いてしまつたので、その埃りまみれの置物を、かあいい、かあいいと撫^なで廻していた。その事を、あとで、猫を作つた某氏にその人が話して、君が逢えばきっと猫をつくらせられてしまうよといつたらば、いや決して僕は魅惑されないとつていたのが、いつか銀の猫をつくつて、呈上してしまつて、そういったものへは内密にしていた。だが、それが縁で、デスマスクはその人がつく

つたということだ。

あなかしこ神にしあらぬ人の身の誰たれをしも誰たれが裁くといふや
ただひとりうまれし故にひとりただ死ねとしいふや落ちてゆ
く日は

をみなはもをみなのみ知る道をゆくそはをのこらの知らであ
ること

——歌集『薰染くんせん』より——

はつ春の夜よを荒るる風に歯のいたみまたおそひ来ぬ——

この最後の一首は、磯辺病院いそべで失せられた枕まくらもとの、手帳に書

きのこされてあつたというが、末の句をなさず逝かれたのだつた。

「嵯峨の秋」^{さが}という脚本のなかで、蓮月尼^{れんげつに}には、こう言わせて
いる。

みめよい娘^こじやとて、ほんに女は仕合せともかぎりませんわ
いな。

おお、そうですぞ、おまえさんの正直な美しい恋のまことが、
やがてきつと、大きな御手^{みて}にみちびかれてゆきます。

昭和三年一月十六日より歯痛、発熱は暮よりあつた。十七日、
磯辺病院へ入院、気管支炎も扁桃腺炎も回復したが、歯を抜いたあとでの出血が止まらず、敗血症になつて、人々の輸血も甲斐な

く、二月七日朝絶息、重態のうちにも『歎異鈔』を読んで、
 有碍の相かなしくもあるか何を求め何を失ひ歎くかわれの
 この人に寿あつて、今すこし生きぬいたらば、自分から脱皮し、
 因襲をかなぐりすべて、大きな体得を、苦恼の解脱を、現らかに
 語つたかもしれないだろうに――

――昭和十年九月――

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年8月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

九条武子

長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>